



第 91 回(平成 25 年 11 月 13 日)定例会の講演要旨

命を紡ぐ ～ 植物を例に

北海道ボランティア・レンジャー協議会会長 春日 順雄 氏



北海道ボランティア・レンジャー協議会会長の春日順雄さんの講話をお聞きして、どんな植物でも置かれた環境に適合するために、あらゆる力を用いて進化していることを知りました。ダーウィンの言うように適者だけが生き残ったとすれば、その適者を次々に作り出す創造主の巧みに驚かざるを得ません。最初に取り上げたフクジュソウはパラボラ形の花が太陽を追いかけて、虫に温かい居場所を提供することによって花粉の媒介をさせているそうです。またネコヤナギは花びらが退化して蜜腺に変わり、雄花が集まって猫の毛のような花穂を作っていることから、早春の寒い時期にも花粉を運ぶ虫

が活動していることがわかるのだそうです。花びらのとても小さいアジサイには飾り花が用意され、雄しべが目立たないツユクサには飾り雄しべを与える自然の配慮に感心します。花びらの色を変えることで受粉のサインを出すウツギや、にせ雄しべを持つフキノトウも地味ながら興味深いものがあります。

春日さんが特に時間をかけて説明したのがオオハナウドの性表現でした。この花はセリ科シシウド属のアンジェリカ(天使)と呼ばれる花で、中世の修道士がこの根の薬効に気付いたのが語源らしいです。花の咲き方はニンジンと同じ散形花序を繰り返す複散形花序で、普通 1 段目は 3 本に分かれ 2 段目から十本位に分かれるので、2 段目で 30 本 3 段目で 300 本位になり、花が飛躍的に増えることとなります。そして不思議なことにオオハナウドの花は雄・中性・雌の三つの時期を経て咲くというのです。まず第 1 番目の花序だけが 3 段階を経て実をつけますが、その場合 2 番目の花序は雌の時期まで進まず、雄の時期で終わります。2 番目の花序は 1 番目の花序に何らかの理由で実がつかなかった時だけ実ります。こうして想定外の事態に対処しているのですね。いまだに原発に固執する東電にも見習ってほしいものです。同じ花が雄になったり雌になったりするという事は、地面の温度によって生まれるワニの性別が決まることから、生物の性別が固定された絶対的なものでないことが分かります。残念なことですがニューハーフの存在も止むを得ないことなのでしょうか。

次に春日さんは結実した種子を出来るだけ遠くに運ぶための植物の知恵を列挙しました。ハンノキやシラカバのように風に頼るもの、オオウバユリのように娘輪茎や 12000 個の種子を上向きに飛ばして増えるものもあり、変わったところではネコメソウのように雨の勢いで種を飛ばすものもあります。また鳥が食べて遠方で糞をして増えるホウノキや、哺乳類が食べるドングリ、獣の体について運ばれるゴボウ等もあります。ランの仲間には葉緑素を持たず菌類と共生して栄養を得ているものもあるそうです。春日さんのお話を聞いて、これまで何気なく見ていた木や草が子孫を残すために涙ぐましい努力をしていると知り、どんな小さな植物もその命を尊重して、大切に守っていかねばならないと感じました。同様に考える大勢の方に支えられているから、北海道ボランティア・レンジャー協議会が 30 年近くも活動を続けていけるのだと思います。(文責 釣本峰雄)

次回の予定

次回(1月8日)は、元札幌市埋蔵文化財センター所長 加藤邦雄氏の講演「手稲の砂丘にくらした人々」と宗本和博氏の研究発表「手稲の学校」を予定しております。(当初、予定しておりましたノ宮氏の研究発表は後日改めて行います)

会場は、視聴覚室です。

「石狩油田と日本石油」について

手稲本町 立花 國次 氏

● 北海道製油所の新設

室蘭製所 20 年史より

明治 33 年ニューヨーク・スタンダード石油会社は、日本への進出を目的として、新たにインターナショナル石油会社を創立し、新潟県直江津に製油所を建設したのを手始めに着々と事業を拡大、北海道油田の開発にまで及んだ。

しかし、その後事業は沈滞し、明治 40 年 5 月同社の要望により、日本石油は、北海道を除く鉱業、製油、貯蔵、輸送等のいっさいの事業を譲り受け、更に明治 44 年 2 月北海道における全事業を買収した。

買収した石狩油田は有望であった。しかも、油井、パイプラインなどが揃っていて、そのまま事業が再開できた。買収直後の 2 月 10 日、当社は北海道出張所札幌に設置して綿密な調査を行い、5 月下旬から、当社の得意とする旧井の追掘と新規開掘を開始した。

内藤社長は 9 月 28 日から数日間、石狩・厚真両油田のほか、南北石油早来製油所を視察、北海道長官や関係監督官署・局長をも訪問した。この時インターナショナル石油ゆかりの石狩町来札を特にくわしく調査している。この時点で、日本石油では、石狩町来札に製油所の建設を考慮していたものと推察されるが、実際には札幌郡下手稲村字軽川（現・札幌市手稲区）に北海道製油所を設置することとし、翌 45 年 6 月ごろ着工した。

同製油所は、函館本線軽川（現・手稲駅）隣接地 55,000 坪余に、蒸留釜 3 基（100 石釜 1、石釜 2）、冷却槽 3 基、油槽 28 基、ボイラー 4 台、蒸気ポンプ 12 台、製缶機 11 台を設備し大正元年 10 月操業を開始した。当初の原油処理能力は 200 石/日で、揮発油、灯油、軽油等を生産し、その生産量は、大正初期の北海道の全石油製品需要を賄うといわれた。製油所の稼働によって軽川市街地はにわかに活況を呈し、製品運搬馬車の往来が激しくなったと云う。

なお石狩油田から来札までは、すでに 2 インチのパイプラインが敷かれていたので、当社は来札から製油所まで約 1.2km を延長することとした。途中の石狩川を横断させる際には、潜水夫を雇って水底にパイプラインを敷設するといった苦勞を伴ったが、大正元年秋に延長工事を完成させた。

それ以前北海道には個人経営の小製油所はあったが、真の製油所の面目をもったものは軽川が最初であった。

北海道製油所では、インターナショナル石油が敷設した石狩油田から石狩川の対岸までのパイプラインを、さらに 6.4km 延長して原油を受入れた。

● 北海道製油所の閉鎖

室蘭製所 20 年史より

明治 21 以来太平洋戦争突入までの 54 年間、石油業の全般、すなわち、掘削、採油から精製、輸送、販売までの一貫した組織を持っていた日石も、政府の臨戦態勢に適應して、鉱山、販売両部門の分離をよぎなくされ、販売部門は昭和 14 年石油共販販売株式会社に移し、鉱山部門は、昭和 16 年帝国石油株式会社に譲渡したことにより、昭和 17 年 4 月以降は精製専業となった。

第二次大戦後の昭和 22 年に設立された全額政府出資の石油配給公団が昭和 24 年 3 月に解散となり、販売施設および業務がそれぞれの所属会社に復帰したことから、日石は、小樽、仙台、東京、名古屋、大阪、福岡に営業所を開設、新たに特約販売業者を選定し、全国的に販売業務を再開した。

この石油配給、販売の民営への移管を前にして、従来道内に大きな販売シェアを持っていた日石は、今後石油需要が増大することを見越して、本道への基地を拡充することを計画し、室蘭、函館、小樽および釧路の 4 港を対象に油そう所用地を選択していたところ、室蘭埠頭株式会社所有の本輪西埋立地のうち係船岸壁付近約 16,500 平方メートルの貸借交渉が成立し、室蘭油そう所の設置を決定した。

室蘭油そう所の工事は、昭和 24 年 4 月 1 日に着工し、同年 9 月 24 日には竣工式を挙行了したが、これを当時の新聞は次のように伝えている。…
…（中略）

一方、北海道製油所は、当時夏季のみ稼働していたが、原油事情など諸般の事情から、昭和 25 年 5 月に閉鎖されることになった。ちなみに、昭和 24 年度における同所の産原油処理量は 3,756 キロリットルであった。さだかではないが情報によると軽川での隣接地を求めたが土地入手が何としてもめどがたたず室蘭に ……（後略）

